

1973年のフルート・サミット出演者4名が揃ったカレンダー（10月）の裏に、サミットの解説文があります。原文はドイツ語と英語のみでしたので、ここに拙訳を掲載します。ジャズにおけるフルートについてのミニ知識としての参考になればと思います。

「フルート・サミットとは、ジェームズ・ムーディー、サヒブ・シハブ、ジェレミー・スタイグ、そしてクリス・ヒンゼが共演した、1973年のドナウエッシンゲン音楽祭における2つのコンサートのことであるフルート・サミットは、前衛的ジャズ祭として名高い同音楽祭の歴史の中でも大成功を収めたジャズ・コンサートに数えられる。

フルート・サミットは、ジャズ・ファンを興奮させただけでなく、ニューサウンドを求め続けるミュージシャン、作曲家、コンサート音楽のプロたちの耳にも大きな刺激となった。このサミットで私たちが試みたのは、フルートの音の豊かさや多様性、またジャズにおけるフルートの組み合わせの可能性を示すことで、それは、今日までのクラシックのフルート奏者が知るサウンドをはるかに超えたものである。下記のアルバム（『フルート・サミット』アトランティック 50 027）に収録された「デュオ・メモノン」のジェレミー・スタイグによるイントロを聴けばわかるが、彼のフルートの音色の数々は、すべての木管楽器（時にはパーカッション）のように複雑で多様だ。

フルート・サミットは、私たちが手掛けてきた他のワークショップやサミットと同様の方針に基づいて企画された。例を挙げると、スイスのバーセルとベルリンで行われた2つのバイオリン・サミット。また、ドイツのヴィリンゲンとデンマークのコペンハーゲンで行われたアルト楽器のサミット、ベルリンにおけるギターとピアノワークショップなどがある。（これらのコンサートも複数のレーベルで聴くことができる。）今回のフルート・サミットも、各出演者が代表する演奏スタイルは異なるものの、実際に一体感を持って演奏できるミュージシャンを一堂に集めることを目的とした。多様性の中の一体感、一体感の中の多様性を発見することが、私たちの音楽の最も興味深い現象の一つといえる。

本サミットのテーマとしてフルートを選んだのは、ジャズの演奏楽器の中で、近年フルートほど劇的な変化を遂げたものはないからである。ともかく、管楽器についてはそういえる。1950年代においては、フルートは脇役楽器で、基本的にはクラシックのように美しい音で演奏されていた。この時代の最も優れたジャズ・フルーティストは、おそらくジェームズ・ムーディーであろう。そして1950年代半ばになると、サム・モーストの影響を受けたサヒブ・シハブが、フルートの音と自分の声を同時に出しながら「オーバーブLOW」する吹き方を始めた。その後、数年の間にフルート奏者たちは、唇、舌、鼻を使ったノイズ、キーを押さえるノイズ、故意に操る上音、倍音など、またそれらをぶつけ合う奏法を取り入れ、「コード」を演奏するようになった。これらの付加的な音やノイズを構造的かつ旋律的に初めて統合させたのが、ジェレミー・スタイグだ。最後に、オランダ出身のクリス・ヒンゼは、今回出演した4名の中で、ヨーロッパ的要素を代表するフルーティストで、ロックの要素を

用いてはジェレミー・スタイグを凌ぐミュージシャンである。

今回の4人は、当初、全員で一緒に吹くことが本当に可能なのか、大きな疑念を抱いていた。しかし、ドナウエッシンゲンでのコンサートのあと、特に2回目のコンサートが成功してからは、新しく発見した可能性に大いに乗り気で、できるだけ早く再び一緒に演奏し、今回スタートさせた試みを持続させることへの期待と意欲を見せている。(訳：アサコ・スタイグ)